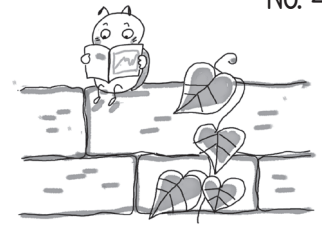




ドイツの図書館で日本の文献に触れる 「繰り返される過去の過ち」を発見



ハノーファーの大学図書館でアルバイトを始めました。日本の専門誌や学会報告集の特集名や人名を、ローマ字で入力する簡単な仕事です。本当は学生向きの仕事なのですが、日本人学生でする人がおらず、話が回ってきました。

週7時間の契約で薄給なのだけど、日本語と触れることができるし、フレックス制で自由がきくのでやってみることにしました。

仕事を始めて、驚きました。こんなに多くの種類の雑誌があるなんて、日本にいた時でさえ知りませんでした！

大学図書館といっても正式には技術情報図書館という名称で、大学関係者はもちろん全国の企業や研究所にも資料を提供している理系専門の図書館です。このような形態の図書館はドイツでも唯一無二で、500人以上の職員が従事していると初めて知りました。

日本は技術が進んでいるので、技術開発や特許申請をするドイツ企業は、英語やドイツ語だけでなく日本語の文献も探そうです。ですから機械や化学、送電線、建築、医療など日本の専門誌がずらりと揃っています。

なぜローマ字で入力するのかと思いましたが、外国人でもその分野の人は日本語の専門用語を知っているようで、ローマ字表記は統一規格ののっって厳密に行われます。

学術論文も大量にあり、京都大学原子炉実験所の小出裕章さんらいわゆる「熊取6人衆」が、1982年に書いた敦賀原発放射能汚染調査についての論文を見つけました。

1981年春に発覚した汚染についてのもので、電力会社による調査に不審な点があり、一部の調査結果が公表されていない疑いがあると痛烈に批判しています。

35年前にも原発は放射能漏れを

起こし、電力会社は隠そうとしていた。同じ構図が現在も繰り返され、多くの人が苦しんでいることに深いため息が出ます。

これらの資料は日ごろ地下室に眠っており、要望があれば書庫から出されます。誰も手に取らない資料もあるかもしれないけれど、必要となればいつでも見ることができる。図書館というのはまさしく知識の宝庫なのだ実感しました。

またいろんな雑誌をばらばら見てみると、技術的な詳細はわからなくても、その道の専門家の真摯な姿勢が文章に現れていて、エッセイなども楽しい。岩波の「科学」7月号の被ばくと甲状腺癌についての特集も読むことができ、得した気分です。

なんとなく始めた仕事だけど、さまざまな発見があり、思いがけず充実した時間となっています。

ごみかんドイツ特派員 田口理穂

AKIRA の 成長記録



こどもミュージアムでの誕生日会

明は10月27日に10歳になり、10歳の目標を日記に書きました。

- ① どの教科でもいいから通信簿で1をとる（ドイツでは1が一番良く6は落第）
- ② 夏休みどこかに遊びに行く
- ③ ハリーポッターを読み終える（4巻まで日本語で読み、5巻目をギリシア語で始めたところ）
- ④ 料理をひとつ作れるようになる（「簡単で、いつも家にあるもので作れるもの、何かあったときのためにさ」と明）
- ⑤ 遅刻しない（「まだしたことないよ」と明）
- ⑥ ママにあ〇、ぱ〇、ま〇けとか言わない（「1番だいじだから!!!」と補足）。

最近、明は怒ると「ママのばか!」とよく言うのですが、よくないことだとは自覚しているらしい。どこまで守れるか楽しみです。

ところで、誕生日に学校で本をもらいました。各生徒が年度初めにお気に入りの一冊を誕生日用に包装して持参し、先生が箱に入れておきます。誕生日の子はその中から一冊もらうのです。クラスメートのために本を用意するのも、自分がもらうのも楽しく、よいアイデアだと思いました。